

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

進藤久乃編著『戦後フランスの前衛たち 言葉とイメージの実験史』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-02-06 キーワード: 作成者: 安原, 伸一郎, Yasuhara, Shinichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001365

〔書評〕

進藤久乃編著

『戦後フランスの前衛たち——言葉とイメージの実験史』

安原伸一郎

本書に掲げられた「言葉とイメージの実験史」という副題からは、まずもって、第一次大戦前のマリネットィによる「未来派宣言」のうちに「政治の審美化」の傾向と危険性を見て取り、その極点は戦争にあると断じたベンヤミンが、他方で、自身と同時代の芸術運動だったシュルレアリスムについては、「文学の領域は内部から爆破され」、意味や自我よりも「イメージと言語が優先する」のだと評価していたことが想起される。

だが、本書がテーマとするのは、書名が示すように「(第二次大)戦後フランスの前衛」である。戦後のフランスにおいては、きわめて大雑把に言えば、思想界ではサルトルの実存主義からレヴィ・ストロースに代表される構造主義へ、そして文学ではヌーヴォー・ロマンから「テル・ケル」へとという大きな流

れがあり、別のところにはむしろ、政治的に保守系のいわゆる「軽騎兵」たちをはじめとしていろいろな作家たちがいて、そのそれぞれが何らかの形で第二次大戦の傷痕を留めていた、とまとめられもしよう。そのなかで、本書で取り上げられるのは、主として「これまであまり注目されてこなかったグループや詩人」たちであり、その意味では文字通り前衛的と言えよう人びとである。

本書が冒頭で示すのはしかし、「前衛」の定義の困難さである。ウリボから前衛と見なされたシュルレアリスムは、今日では前衛とは言いがたいのではないかと見直されているし、実際のところ本書には、現在においては、「新しさ」の神話を追求した前衛の態度が批判的に再検討され、目まぐるしく変化した前世紀の政治状況に伴い前衛と古典主義の目指すところも揺れ動くことが明らかになつてきているとの認識が示されている。そこで本書は、見えにくくなっている戦後フランス(に限らないが)の前衛の少なくとも一端を、イメージと言語をめぐる活動を軸にしながら提示する、という。そうして拾い出されるのは、第二次大戦の余波、国際性、複数のグループの同時並行性、現在の具体的な生の変革への志向という四つの特徴である。

この点から見てたいへん興味深いのは、本書に収められた論

文の多くに描かれるのが、近しく見える人びとの間にある、見方によっては些細にも思われはするが当人たちにとっては決定的な相違点のもたらず、離合集散の群像劇にほかならないことである。「サン＝タルバンのパラドックス」(ラファエル・ケニグ)では、アール・ブリュットの傑作群が、レジスタンスの一つの拠点にもなっていた第二次大戦下のサン＝タルバン精神病院で、内的に孤立した各個人によって生み出されたというよりは、そこでの制度精神療法の試みを通じて共同生活の空間において初めて可能となったことが示され(私は本論を読むまでデュビュッフエが人種差別主義者だったことを知らなかった)、「コブラとシュルレアリスム」(長谷川晶子)においては、コブラの面々が、「共に作業すること」を重視しながらも、自分たちと近いシュルレアリスムの理論を教条主義として手厳しく批判し、コペンハーゲン、ブリュッセル、アムステルダムを移動しながら運動の中心を作ろうとはしなかったがゆえに三年で瓦解することとなった経緯がたどられている。また「ある概念の生成」(門間広明)では、当初は心酔したレトリスムに芸術の延命を望む姿勢を見て取ったトゥポールが、そこからの離反を通じてシチュアシアオニストとしての思想を育んで行った過程が描き出され、「渡辺一夫、コレージュ・ド・パタフィジック

の太守」(前山悠)では、ラブレーを日本語に翻訳したことでクノーラのグループの太守に任じられた渡辺の示した、文学を通じてこそ戦時下の社会に抵抗しようとした姿勢が、パタフィジックの面々の示した、文学や芸術と社会とを切り離したり社会への無関心を保つたりする姿勢とどれほど隔たっているかが論じられる。

このような合従連衡や差異が、戦後フランスの一部の前衛運動の見えにくさの一つの理由でもあるのだらう。近いはずの人びとが、集まっていたかと思えばいつの間にか批判の応酬を繰り返したり、口を閉ざしたりしているのだから。とはいえ、そうした離合集散は、狭義の政治参加というに留まらず、現実世界に自分の作品を通じてどう働きかけられるか、働きかけるべきかという作家たちそれぞれの前衛的姿勢の帰結なのかもしれない(「コブラ時代におけるクリスチャン・ドートルモンの手書き文字」(進藤久乃)では、この詩人の「絵・言葉」の実践がこうした現実への問いに貫かれている様を示されている)、「自身に誠実な各人が、他人の考えにしがたつて順応主義的に生きるのではなく、非順応主義者であり続けようとするこの結果なのかもしれない。

ところがポーランは、おのれの独創性を追求し、順応的なも

のとも言える常套句を排除するロマン主義以降の傾向を「テロリズム」と呼んだのだった。だとするならば、前衛の運動は否応なしにテロリズムに陥るのだろうか。前衛がそのような類型化を拒否する性質のものである一方で、本書所収の「ジャン・ポーラン」(久保田斉也)では、表現とともに規則が(再)発明されるといふその言語観から、ポーランの言う修辞学がそもそも前衛と保守との区分を無効にするものであることが示される。そして、ポーランの述べるごとく言語が同時に言葉であり観念であり事物であるとするなら、言語の物質性、ひいては文字の物質性に注意を払った詩人ボンジュの名が出るのは必然だろう。ボンジュによるジャコメッティ論が粗上に載せられている「文字を杖に」(綾部麻美)では、ボンジュがその実、語や文字の抽象性ゆえにこそ「語の厚み」を探求したのだと論じられる。そして「演劇に詩を取り入れること」(菊池慶子)で分析されているような、知覚以前の感覚に遡ることを試みながらも安直に非人称性に向かうのではなく「個人的・人称的なもの」へと向かい、生身の身体のうち留まろうとする作品『クワッド』におけるベケットの姿勢は、やはりどこまでも非順応主義的なものに見える。

ところで、前衛という言葉を聞くと、私など、フランスのダ

ダイスムからシュルレアリスムへの流れを想起すると同時に、直接知っているわけではないけれども自分にとつてより身近な、戦後日本の実験映画やアングラ演劇をも思い浮かべてしまうのだが、本書には、フランスと日本の同時代性や分岐点を教えてくれる論文も収められている。「北脇昇」(ヴァンサン・マニゴ)では、一九二〇〜三〇年代の日本にすでにシュルレアリスムが紹介されていたことが指摘された上で、ダリの理論を吸収しながら独自の発展を遂げた個人的シュルレアリストとしての北脇昇が論じられる一方、戦後については「フランスと日本の前衛詩学の接点」(マリアンヌ・シモンII及川)において、「空問主義」の発案者ビエールおよびイルゼ・ガルニエと、日本の新国誠一との交流の歴史がたどられ、翻訳の問題も含めた両者の影響関係が、理論的・美学的・技術的・記号論的な視点から検討される。そして、一九五〇年代以降のフランスでの動向にかんしては、とりわけ「音声詩」「行動詩」の詩人ハイツイックを中心にして、「行動／直接／元素／全体……詩」(ガエル・テヴァル)では書物というメディアから詩を解放しようとする彼の姿勢が分析され、「詩とその進行」(熊木淳)では、テクストと声を切り離れたアルトーや、文字列とページを切り離れた視覚詩・具体詩の後で、ハイツイックがこの二つの動きを総合

しようとして試みたと論じられる。本書の掉尾に置かれた「『音声詩』・『行為詩』がめざしたもの」(ジャン・ピエール・ボビヨ)では、イブーからブレーヌに至るまでの一九四五年以降のフランスの前衛詩が、とくにメディアの視点から整理されている。

このように眺めると、形態や方向性や理念は種々あれど、前衛運動というものはつねに存在する、ある意味では普遍的な試みなのかもしれない。だが、普遍的であればこそ、人びとが一瞬で繋がってしまう現代では、それはたちまち類型化され、消費されてしまいかねない。シュルレアリスムが誕生した時の衝撃は、「大きな物語」が失効して久しい今日では、おそらく追体験しがたいものなのだろう。と同時に、否定されるためであるにせよ再発見されるためであるにせよ、何らかの形で多かれ少なかれ参照され続ける、「イメージと言語が優先する」シュルレアリスムの大きさが、逆説的ながらも浮き彫りにされるようだ。

そして、編者も示唆しているような論文間のつながりの緩やかさこそが、戦後フランスの前衛を体現しているのかもしれない。そうした前衛の見取り図を提示してくれるだけでなく、巻末には「読書案内」も収録されている本書には、そもそも私の知らなかった人びとや作品が数多く記されており、益するところ

ろが大きく思われる。

(A5判上製、三六八頁、水声社、二〇二三年十一月発行、
六〇〇〇円+税)